

歴史講座「南部と津軽の秘史」

文責 工藤 剣

南部・津軽両藩の由緒は、それぞれの藩に有利になるように改ざんされている。その訳は「戦国時代に頂点で指揮する領主は家臣の目を伺いながら、領民の生活を守ることが精一杯の時代であった」からだろう。領主に聞こえる声は、嘆きばかりで、藩領民には不利な情勢は伝えられなかった。

戦国時代の奥州仕置では、九戸族皆殺しという凄惨な結末を迎えた。対する三戸南部氏は豊臣政権の大名と認定され、中央政権の裁きは、両極端な結果となった。この両極にあるものは何かを調査し、この調査資料は南部根元記、青森県史等の官選史書以外に民間記録書から、甲斐諏訪神官若林家、不来方福士家、八戸名久井家、野瀬工藤家、陸中久慈家、津軽高屋家、安芸小笠原・奥瀬家の古文書から、史実が歪曲されている部分を西暦年号から年代を特定し「秘史」として発表します。

1、南部氏の糠部下向に関する秘史

南部光行は甲州巨摩郡南部牧に居館を構え、牧場の経営に力を注いだ。源頼朝の平泉征伐に従軍し、軍馬功劳により論功行賞を賜り、特に産馬の経験が認められ、奥州では広大な牧場を有する糠部に、貢馬(こうば)奉行として派遣された。南部郷は富士川という大河が駿河湾に注いでおり、甲斐と駿河との間の重要な交通路となっていた。奥州御牧(みまき)の牧監団(もくげんだん)は、建永元年(1206)10月に富士川から駿河湾に出て太平洋を北上、八戸浦から大河を遡上し相内村観音堂に着いた。



光行を団長に派遣された 13 名の諸氏は三上、桜庭、安芸、福士、木村、神、一条、佐藤、星、原、馬場、奥寺、切田氏と記載されている。糠部郡は工藤、横溝、会田氏他の領地があるが境界が曖昧なため、これを検知する役人団だろうか。平良ヶ崎城は検地を司る役所で承元元年(1207)完成した。光行は奥州の御牧と荘園鳥瞰図の作成を、譜代の臣(福士、三上、桜庭、安芸)4 人に託し鎌倉へ報告に戻った。

報告の結果、承元5年(1211)奥州の御牧管理のことで、小笠原御牧の牧士(光行長男)と、幕府奉行人三浦義村代官との喧嘩から、直轄管理が必要だと幕府から提案された。

これにより、奥州の諸牧地を図面化する仕事が発生、光行は奥州得宗被官に発令された(頼朝時代にすでに得宗政治

が発足していた)。幕府が軍事警察も担当し、朝廷よりも優位な日本の支配者となりつつあった。得宗は「国王」「国主」とよばれ、その子息は将軍の若君と同様に「若公」と呼ばれたため、将軍争いが激しくなった。正治元年(1199)頼朝が急死、嫡男の頼家は2代将軍となるが元久元年(1204)北条の手兵によって殺害された。報告に戻った光行は、幕府警護役となり糠部に戻れず、建保3年(1215)鎌倉で没した。建保7年(1218)3代将軍の実朝も甥の公暁に暗殺された。これに

より頼朝政権が滅び北条の執権政治となった。承久元年(1219)2代目被官の実光が北条の被官として初めて下向した。この間、福士義近は単身にて貞永元年(1232)斗内館57歳で亡くなるまで糠部検地に奔走した。実光と下向を共にした臣は、津村、岩間、上野、逸見、石井、川守田、海老名、玉懸の諸氏である。実光は得宗被官として糠部にて(得宗領)の検地を15年に渡り政務し嘉禎5年(1239)3月に平良崎で亡くなった。



2、三戸南部3代～11代の領主

得宗被官3代、時実には太郎政光、二郎実政、三郎政行と3人男子がいるが、時実は2代目実光の死後、嘉禎5年8月(1239)初めて三戸に来て三光庵を建立し、実光を吊った。

時実 は北条時頼の信頼が厚く、政務を託されていたので、鎌倉を離れることが出来ず鎌倉で亡くなった。代償として建長2年(1250)8月に執権から糠部(三戸、四戸)を初めて賜る。南部4代政光は安達泰盛に与した罪で、二郎実政と共に若くして戦死した。三郎政行は工藤祐光の娘(八重)の婿(工藤政行)となり、6男1女を残し、永仁3年(1295)討幕の疑いにより39歳で処刑された。

南部氏の4代～11代までは若くして戦死している。10代目茂時は北条氏からの婿で、高時と運命を共にして藤沢で亡くなった。名ばかり領主が続いたが9代祐政は、時実の嫡孫として認められ幕府から糠部(一戸、三戸、四戸、五戸、七戸)を賜った。甲斐に残された時実の家督は遺言により、嫡孫の生存する宗実と政行の息子間で領地争い裁判になり長く争われた。

三戸9代祐政は、南朝方武将として参戦している。祐政の父親は7代祐行だから、師行の弟となる。祐行の弟に信行改め政長がいる。正慶3年(1333)5月に藤沢で殉死した10代茂時は北条からの婿で、三戸に下向していない。師行の図らいで、祐行、祐政父子は南北朝前半40年余に渡り、三戸城を親子2代に渡り支えた。

また、南部町上名久井荒神堂「林寺門間数改書上帳」に荒神堂三尺四方応安7年(1374)建立 施主南部11代仏口口口工藤民部大太夫梅京法公 応安7年12月28日とある。口四文字は解読不能だが11代は南部信長であろうか。

3、南部四天王について

糠部の御牧と荘園鳥瞰図の作成等を福士、三上、桜庭、安芸の4人に託して鎌倉へ戻った光行は、糠部には戻れなかった。検地を託された4人は南部四天王と呼ばれた。

福士氏は、閉伊、久慈、種市、種里、北氏の祖。安芸氏は奥瀬村を領し、後に奥瀬氏、小笠原氏を輩出し西氏の祖。三上氏祖先は三上治部少で分裔は四戸氏を称し、南氏の祖。桜庭氏は赤石館に住し、幕末の毛馬内村桜庭裕橘、東政図を輩出し東氏の祖。この4氏は聖寿寺城の東西南北に客として屋敷を固めている。

4、光行の男子は3人

南部家文書によると、光行の長男・行朝は庶子のため一戸の祖、次男・実光は三戸南部を継ぎ 3 男・実長は八戸の祖、四男・朝清は七戸の祖、五男・宗清は四戸祖、六男・行連は九戸の祖としているが……？

山梨県「南部町誌」によれば、光行の男子は3人だけで4男以下は存在しない。長男の太郎朝光は小笠原を称し牧監として甲州に留まった。つまり一戸、四戸、七戸、九戸は南部氏以外の領主が存在したことになる。この中で一戸、四戸、七戸、九戸の4氏は九戸の乱で領主は全滅した。後世になり盛岡南部叢書等の官選書は、滅亡諸氏を巧みに引用し、南部系図を作り上げた。その結果、建永元年(1206)検地のため下向した史実まで疑われてしまった。九戸の乱に命を捧げ殉死した譜代の諸氏が哀れとしか言いようがない。

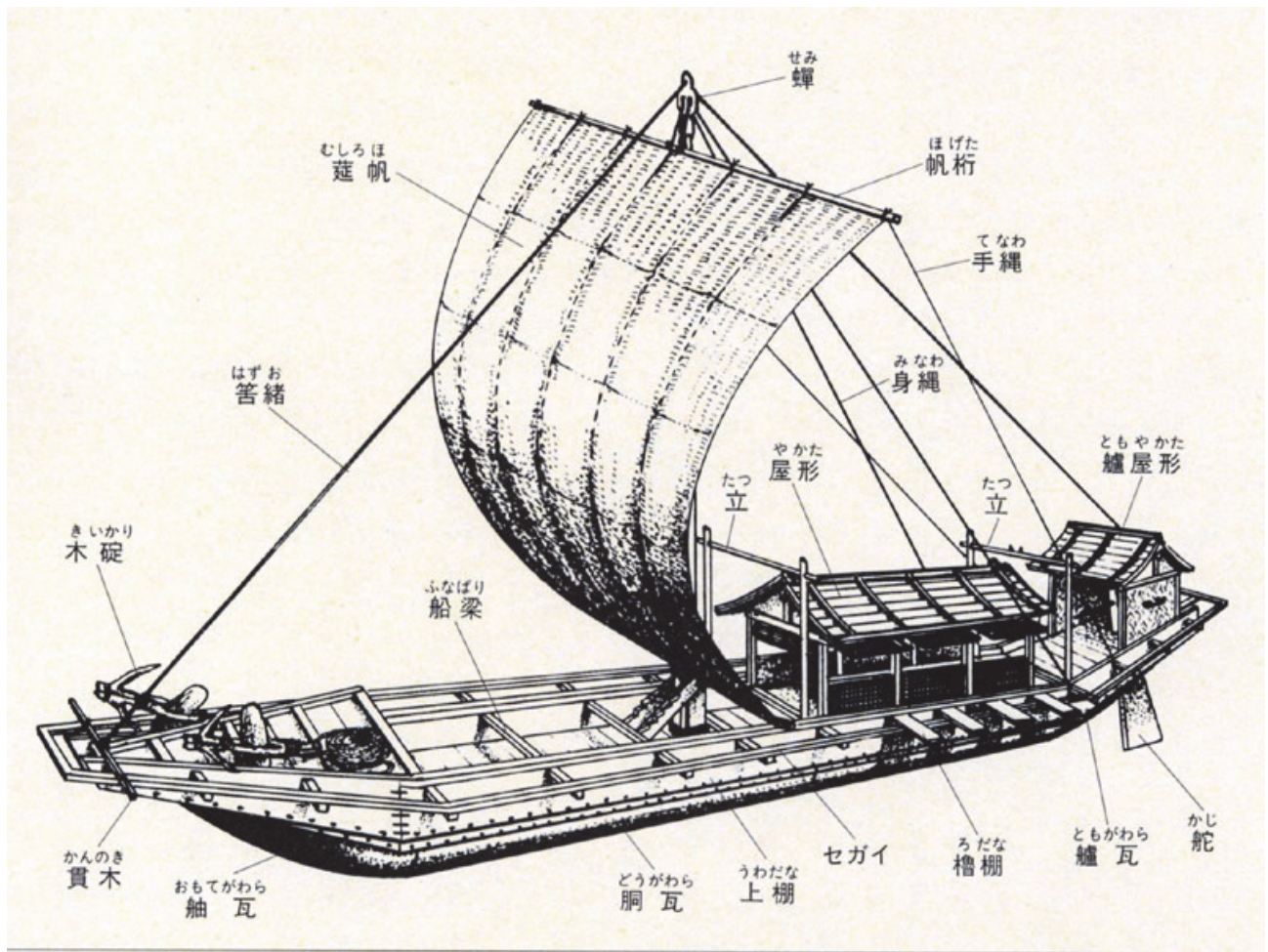
5、鎌倉時代の造船技術と軍港

吾妻鏡によれば源頼朝は治承6年(1182)伊豆山神社に諸国通船 50 隻(長さ55尺、100石積、60人乗り)を寄進した。幕府は貞永元年(1232)に人工島(材木座沖)に軍港を設置して熱海には造船所を備えた。この造船所から進水する船は大小を問わず櫓式になった。帆船は進行方向に風が吹くまで待機が多かった為、大型海船は

帆と櫓の併用式となった。幕府は鎌倉沖に日本最大級の人工島（和賀江島）を設けて海の関所とした。関所は貞永元年8月26日竣工と吾妻鏡にある。



これにより千石船（150 トン積）を諸国に廻して廻国船による得宗領直轄政治を開始した。ドックは足利～江戸幕府でも活用されたが、度重なる津波により日本最大ドックは破壊された。東京海洋大学で海底の遺跡調査を始めた結果、ドックは伊豆の大石で築いた根石造りの人工島だったことが判明した。大型船を必要としなかった時代から、年貢米を全国から回収する得宗政治になり、承久年代（1219）から造船技術が大きく向上したが、江戸時代からは軍船・商船を問わず 500 石以上の船を没収した。これは水軍の主力艦の安宅船（あたけぶね）を没収し大名の水軍力を抑止することを主眼とした政策であり、西国では 500 石（75トン積）以上の造船は禁止され、ペリー黒船来航まで造船技術は発展しなかった。



6、福士光信は津軽始祖か

種里の大浦祖は13代守行3男、家光は羽後小野寺氏に敗れて、金沢落城で切腹した家光というが、家光の男子2人は久慈に逃げ帰り成長して嫡男家信が金沢家2代目となり、3代目の光信を設けて久慈から種里に入部した光信が実質の祖とする。(津軽高屋系図)4代目盛信が勢力を拡大し、大光寺南部氏、浪岡北畠氏と同格までに成長したと伝わる。

他に有力な説として福士文書、文明2年(1470)南部 17 代光政が堀越城を攻め落とし、福士威信(たかのぶ)は自害して威信の子、光信が福士長清に助け出されて久慈の閉伊口に逃れた。閉伊口で成長した福士光信は文明10年(1478)、根城南部の執権であった福士長高の配慮で南部姓・家紋を認められ、光信は閉伊口一族(織笠氏)と共に根城から種里に入った。



7、津軽為信は陸中久慈治義の次男 久慈平蔵

5代目為則は病弱で体も不自由であり病状が悪化し、後継ぎを決める必要があり、為則は三家老を枕元に呼び寄せ、後継ぎを幼い二人の息子たちではなく、次女に久慈家から為信を婿に迎えて6代目にすることを告げた。このことにより永禄11年(1568)為信は為則の次女に20歳で婿入りし大浦為信となった。為信の父は大浦氏の弟系の治義である。為信に、津軽押領指示を与えたのは三戸南部22代晴政というが？

三戸南部は元亀2年(1571)石川城攻撃により石川高信が自害した史実を隠ぺいした。高信は南部晴政の叔父であり、田子信直の父親である。津軽穀倉地帯を支配する実質1万石以上の津軽郡代である。南部は後継者争いで二つの派に分裂した。晴政派＝九戸党で、信直派＝石川党であった。嫡子がない晴政は、信直に南部宗家23代目を渡すことは不本意であり、これが九戸戦争の発端となった。

8、南部領と称する津軽領域と年代

古くは萩ノ台合戦に端を発する十三藤原氏と藤崎安東氏が領土争いを繰り返した穀倉地帯は、岩木川と平川が合流する藤崎(淵先)の魅力ある稲作地帯であった。両氏は津軽全土の覇権をかけて激しく対立したが、藤崎安東氏が勝利した。

以降安東氏は藤崎安藤を称した。(直木賞安東龍太郎著)



応永 25 年(1418 年)三戸南部守行は、藤崎安藤の大光寺城を攻撃し陥落した。敗れた藤崎安藤氏の別家に大光寺あり、大光寺秀光が応永年間(1394～1428)に大光寺城に移ったが、南部に敗れ南部氏が大光寺城代と津軽郡代となった。勢いを増した南部14代義政は永享 4 年(1432 年)福島城も攻撃した。不意を突かれ堅固を誇っていた福島城は陥落し、藤崎安藤は近くにある唐川城(山城)へ退き、抵抗したが敗れた。さらに小泊の柴崎城まで退き、ここでも敗れ、松前へ渡ることとなる。この結果、南部氏は南部領域と津軽全域を領することになる。(北上から津軽・下北までの全域)



しかし、天正 3 年(1575)大浦為信の攻撃に遭って南部大光寺城は落城し、後は大浦氏が領した。慶長 4 年(1599)に為信の女婿津軽建広が城主となったが、慶長 15 年に廃城となって城郭は破却、追手門は弘前城の亀甲門として移築された。



城址碑の後は大光寺コミュニティセンター(公民館)

9、大浦為信の津軽統一戦

為信による軍事行動は、天正 14 年(1586)秀吉の惣無事令に背くものであった。為信は信直に劣らぬ中央外交をスピーディに展開し、南部氏を名乗る津軽内三郡領主として豊臣政権内で認知された。南部氏より早い小田原参陣で津軽討伐は回避され、南部信直は津軽の地を失ってしまった。

為信はこれを機に源姓南部氏の系譜と訣別し、近衛前久の猶子となり本姓を藤原氏に転換することに成功し、為信一代で大名の座を獲得したのである。為信の歩んだ道はともかく、下克上が生んだ英雄の一人であった。

10、津軽穀倉地帯に存在した南部の出城



(堀越城)

明德3年(1392)、南北朝合体後の朝廷から不来方に派遣された中央官僚、福士政長郡代の次男秀定が、津軽の南朝方勢力を鎮圧するため、津軽郡代秀則と改め堀越城に入る。

城主は福士秀定改め津軽秀則。秀則は十三藤原、黒石工藤と同盟を結び幕府に推挙した。その結果、津軽の南朝方は浪岡北畠御所のみとなった。文明2年(1470)南部光政が堀越城を攻め落とし津軽秀則、威信は自害した。

(蓬田城)

三戸南部は四天王の一人である安芸氏の奥瀬健助を蓬田城主に定め、津軽北側の領地を固めた。

(和徳城)

天文2年(1533) 津軽郡代となった田子高信が、南部23代 安信の家臣、出羽守小山内満春を城主に抜擢し、津軽郡内を固めた。満春は元亀2年(1571)に為信に攻められて嫡子の讃岐、孫と共に討死にした。「家の汁」発祥の家と称される小山内出羽守の和徳城は落城した。

(藤崎城)

南北朝期に入り、十三藤原は南朝側、藤崎安東は北朝側に一族が分かれて戦った。結果として藤崎城は十三藤原氏が居城した。その後、天正13年(1585)に大浦為則が居城したが、これを最後に藤崎城は廃城となった。

(浅瀬石城) 稲架館とも表記

千徳政久の第2子が2代貞武と称して田舎館城主となった。稲架館城主5代千徳政武は、大浦為信軍3千騎をもって攻められ、城主政武・貞武以下330人余とともに落城した。この落城1か月前の天正13年4月、南部側から千徳氏救済に向かった下名久井日向守20代兼隆を隊長に約1500の騎馬隊は、門前払いされ決裂した。兼隆の正室が政武の長女「於多世」だった故の出陣だったが、八甲田越えの疲労と地理の不案内から、南部騎馬隊は浪岡へ敗走し南部史から抹殺された。

(大光寺城)

天文7年(1538)剣吉城主工藤内膳の婿養子に入った不来方城主、福士忠政の次男 政安は若くして武将の才覚があり、高信に認められ21歳で大光寺城代に推挙された。天正16年(1588)には大館城代となる。福士政安(後の北信愛)は、京で誕生、足利学校に学び、前田利家と共に尾張幕府軍に従軍した経緯から北尾張守を称した。信愛の嫡子・南部左衛門の亡きあとは、後見役であった滝本重行が城代となった。大光寺城は城下家数90軒、石高1万6000石を誇っており、浅瀬石城、新屋城、尾崎城、高畑城、沖館城、乳井城、杉館、三ツ目内城

を支配し、津軽三大名（津軽石川、十三安東、大光寺）の一つになった。

（油川城）

城主は奥瀬善九郎とされ、南部四天王の一人安芸氏の家臣が支配していた。天正 13 年（1585）3 月、為信は城近くの山上で多数の篝火（かがりび）をたかせ、大軍の襲来と見せかける謀計を用いた。これを見た奥瀬善九郎は田名部へと逃亡した。これで為信は一兵も損せず、油川城を攻略した。

（横内城）

南部 20 代信時が外ヶ浜周辺の支配強化のため、四男の光康が、明応 7 年（1498）に横内城を創建したのが最初とされる。湿原であった青森平野に堤川を開削するなど開発を進め、現在の青森市の基を築いた。横内城は天正 13 年（1585）大浦為信の手に落ち、以後大浦氏が支配した。現在は常福院となって本丸跡・空堀が残っている。

（石川城）別名：大淵ヶ鼻城とも

南部安信は病弱であったので、南部 22 代政康の嫡男、高信は天文 2 年（1533）平賀・田舎・沖法の三郡を完全制圧し、石川の大淵に拠点を置き、以後津軽郡代となって石川氏を称した。元亀 2 年（1571）高信は大浦為信の堀越城落成の祝宴の誘いを為信から受け、その隙に軍勢を集め攻められ、石川城は落城し高信も自刃した。



11、根城南部の事績書には

元亀年間(1570～72)とされる事績書が、岩手県中世文書に収録されている。南部24代晴政が、信直派の浅水城と剣吉城を攻めて、根城の八戸政栄にも出馬を要請した「南部晴政書状」である。同時期に、浅水城主が八戸政栄に宛てた「南慶儀書状」では、南部勢が大鰐で敗れたことを告げている。書状内容は「仰せの如く津軽郡相敗れ候」とか「大光寺申され候得共、未だ無音に候、御心許無く存じ候」あるいは「大鰐攻められ候て、下館打ち破れ候得共、日暮れ候て・・・」と述べている。南部信直の父親 高信が討死したことを意味する。

12、九戸党の多くは為信に我が子を託した訳

(その訳1)

津軽の諸城が陥落した際の津軽統一戦に参加した兵士に、九戸ゆかりの人が多い。例えば、一戸、櫛引、福士、久慈の名前がある。一戸、櫛引氏は最初から最後まで統一戦に参加している。福士氏は、不来方城主の分家で、本家には為信の妹が嫁いでいる。つまり、久慈宗家と九戸宗家は数回の血縁で結ばれている。

(その訳2)

為信は九戸の乱後、九戸政実、大湯四郎、武田九郎等の子供達を津軽に連れ帰り保護している。政実の子・市左衛門は戦後、津軽の家臣になり、御馬廻り役人として400石を与えられた。大湯四郎の血脈は重鎮となり、何れも幕末まで家名の存続が認められている。武田九郎の系統は途中から姓を松野と改め、慶長10年(1605)大阪に同行して為信を看取り、後事を託された老中・松野久七信安は武田氏の後裔である。

(その訳3)

為信の孫となる津輕3代信義は、為信の長兄名を襲名している。4代信政には、彦爺さん(久慈信政)の名を襲名している。これは為信が久慈治義の次男説を物語っている。

13、津輕氏存亡は石田三成の斡旋による小田原参陣

為信は不利な状況を打開するため、豊臣政権内の要人に鷹などの贈答品を贈り、羽柴秀次や織田信雄を味方にすることに成功した。為信は信直に劣らぬ外交を展開し、秀吉の側近、石田三成を介して秀吉に謁見している。その結果、南部を名乗る津輕三郡の領主 南部右京亮としての地位を豊臣政権内で認知された。証として、天正17年(1589)秀吉から為信宛ての礼状は、南部右京亮殿になっている。その内容は遠路はるばると鷹を持参して献上した事に対する礼状で、道中で鷹を損じても不問にするとした文書である。

14、長男が元服時の烏帽子親は石田三成

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いの際、三成をはじめとする石田一族の多くが討死している。一方、三成の子孫はその血脈を、青森県内で江戸時代を通して伝え続けてきた。なぜ青森県か、それは弘前藩の藩祖・津輕為信が、三成の次男である石田重成と、その妹にあたる辰姫を救い出し、自分の領地にて匿っていたからである。

関ヶ原の後、為信は大阪城にいた三成の2人の子供を密かに救い出し、重成を津輕へ、辰姫を上野国(群馬県)に保護した。辰姫が成人すると、為信は次男の信枚に、辰姫を側室として嫁がせた。この2人の間には嫡男にして、弘前藩3代藩主である信義が誕生。この信義には30人以上とも50人以上とも子供が産まれたとされている。別の見方で三成の子孫は幕末以降、青森県内に広く繁栄したと考えられる。三成の次男、石田重成

は、名前を杉山源吾と改め、弘前で隠棲し1641年に死去した。長男の杉山吉成は弘前藩に召しだされ、2代目藩主信枚の娘と結婚。杉山吉成の家系は江戸時代を通して弘前藩の家老職を努めて、明治維新に至るまで存続したと言われている。

15、津軽じょんがら節発祥の地



津軽の藩祖「大浦為信」に滅ぼされた、田舎館城主「千徳氏」の悲運を唄った口説が初めといわれている。

慶長2年(1597)千徳氏は為信勢に討ち滅ぼされて落城し、その戦いで炎上した神宗寺の「常縁和尚」は、本尊を背に浅瀬石川の深淵に身を投げて果てた。常縁和尚は、約1年後に下流で発見され部落民の手でねんごろに埋葬された。部落民は千徳氏の悲運を嘆き、常縁和尚の名を借りて唄った口説節が「じょんから節」で、発祥の地だと伝えられている。常縁和尚の墓は浅瀬石川河原近くの墓地にある。

むすびに

陸奥国は縄文時代から海の幸、山の幸が豊富で、北は千島列島から南は種子島まで東西に細長い列島だった。上北郡には日本中心の碑がある。海運技術が進歩した鎌倉時代以降、航路を活用した都の文化や必要な人材が、想像以上に陸奥国に入り込んだ様子が伺える。少雪地帯である八戸には大和朝廷からの代官が、丹後平と称する高台に派遣されていた。稲作技術が発達した古墳時代以降は、豪雪地帯でも十三湊を活用した安東船が、京や瀬戸内海から西日本の文化や生活用品を運んだ。交通手段は良湾湊に流れる大川が航路となり、内陸部にも運搬できる大川の流域から発展したことが、今の青森県文化を形成する素地となった。

南部氏系図

身延町誌南部氏系図+諏訪明神社南部氏系図に加え、武家家伝__南部氏系図及び武将系譜辞典の[南部家人名録][南部家臣団][一部名久井家収録]系譜の組み合わせ形式。

南部信濃三郎光行→住甲斐国南部御牧 文治5年7月奥州泰衡追討ノ時有功 建保3年(1215年)3月18日卒

① 南部光行（男子3人記之如）

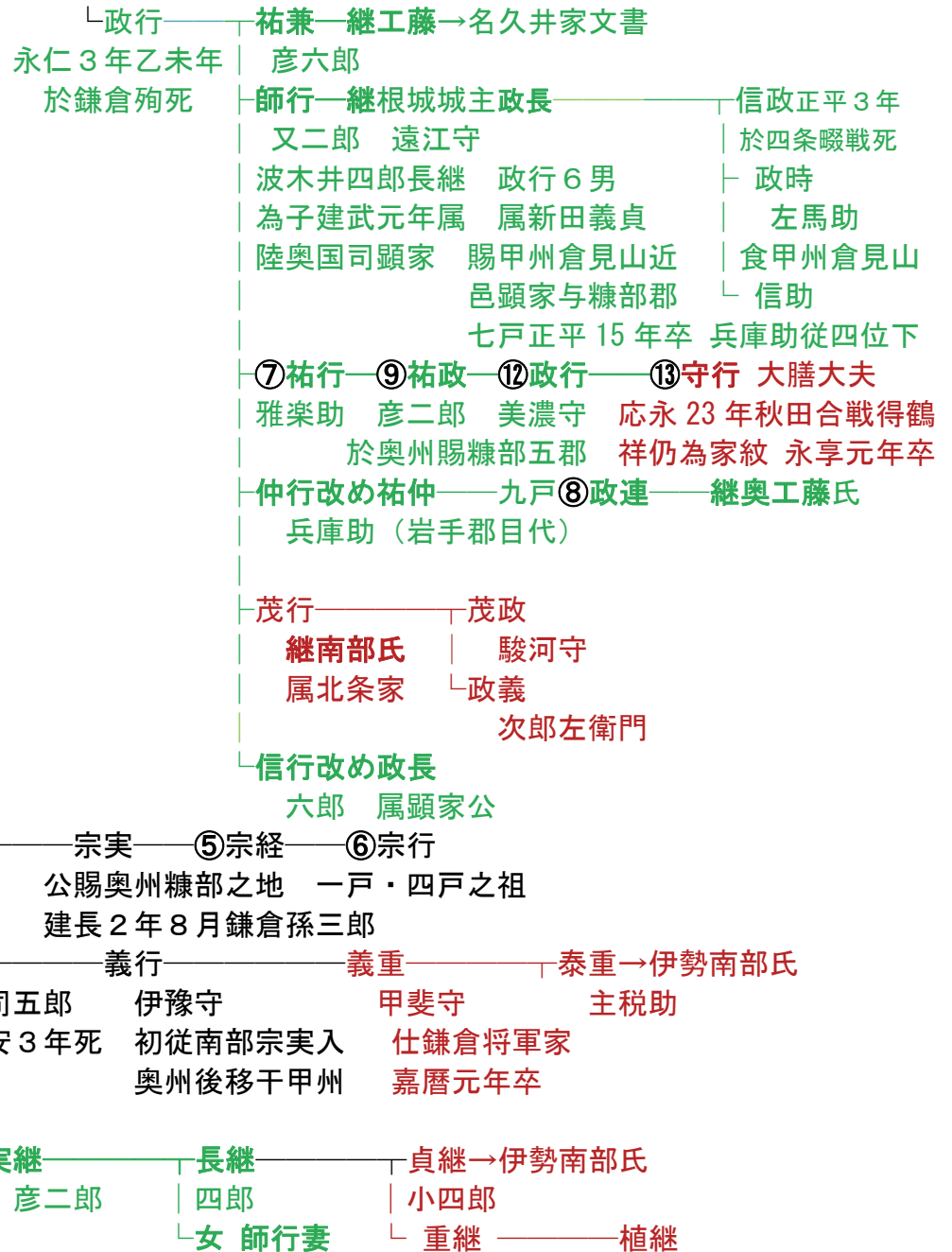
甲州小笠原牧監の為（小笠原於称）

朝光	光時	光貞	泰光
小笠原太郎	太郎	太郎	又太郎
	助光	光信	信薰
	小太郎	二郎	萬澤太郎
	守光	時家	
	三郎	孫四郎	

②実光	③時実	④政光	時光 於鎌倉殉死
南部彦次郎	又太郎	彦太郎	又太郎
嘉禎5年8月卒			⑩茂時—継子無… 継南部茂行—茂家
		実政	右馬権頭 →伊勢南部氏 左近将監
		彦三郎	実北条相模守熙時次男 ⑪信長

正慶3年5月23日
高時入道共鎌倉殉死

伊豫守
時長
甲斐守



注: 黒字の武将名は鎌倉時代で、南北朝時代は南朝が緑、北朝が朱に色分けした。